

南極は自分のすぐそばにある

澤柿教淳 (松本大学・教授)

南極とは縁もゆかりもなく

富山県の、立山連峰の麓の、小さなお寺の次男坊。私は、南極とは縁もゆかりもなく育ちました。大学を出てからはまず理科の教員となりました。とりわけ某大附属小勤務時代には、自然の本質に迫る理科教材を開発することに明け暮れていました。そんな折、「南極教員派遣プログラム」がスタートしたことを知りました。

足かけ4年をかけて

さっそく本事業の詳細を調べ、応募の決意を固めました。しかしながら募集はすでに終了。次の募集を期待してただ待つことになりました。1年後、再び募集が出たのを確認するとすぐに勤務校に相談しました。戻ってきた回答は不可。代替の人材やその他の環境が整わないからとのことでした。しかたなく、次の募集に向けて気持ちを切り替えることにしました。また1年後、再び勤務校に相談。すると今度は許可がでました。温めてきたアイデアを応募書類に記して応募すると、届いた結果は「補欠」。残念でしたが、不思議と南極は自分のすぐそばにあるという感覚になりました。さらに1年後、再々応募。結果、南極観測隊への同行が許可されました。「南極授業」という目標に出会ってから4年が過ぎていました。

南極素材の教材化

そこから急ピッチで教材の検討と作成を始めました。教材開発は私のプロパーです。まず着目したのは、第1次隊が建設した棟が現存しているという事実です。その建設には、郷里富山の「芦峠5人衆」が重要な役割を果たしていました。北アルプスの山岳ガイドとしての高い技術力を見込まれたそうです。この事実を教材化することは、富山の教員としての使命だと思いました。

次に氷河に視点を当てました。氷河というとヒマラヤのような高所や北極・南極を思い浮かべますが、近年、立山でも氷河の存在が科学的に確認されました。約14,000kmも離れた富山と南極の間には何かしら共通する自然条件があることは興味深いことです。氷河の認定には、南極で用いられた機材が活用されたそうです。こうして南極素材の



昭和基地からの南極授業

教材化を順次進めていきました。

南極との縁やゆかりを感じて

昭和基地には「福島ケルン」があります。第4次隊で遭難した隊員の慰霊碑です。その前で自らお経を唱えてきたいと考えました。実家はお寺ですから装束やおりんはすぐに手に入ります。それらをリュックに忍ばせて昭和基地まで持ち込みました。夏隊の多忙な活動の中、わずかな時間を見計らって数名の同志とともに越冬メンバーの安全を祈願してきました。

「芦峠5人衆」と同郷の、「氷河」を抱く立山連峰の麓の、かつてお経を習った小さなお寺の次男坊。そんな自分のすぐそばにも南極はありました。そもそも「南極教員派遣プログラム」の対象は教員限定ですが、私が教員になったきっかけは親父が理科教員だったというのもその一つ。凍りついたリュツォフォルム湾が一望できる昭和基地を理科室代わりにして、楽しく実験できたことをたいへん有り難く思っています。

プロフィール：

1967年富山県生まれ。博士（教育学）。2012年第54次南極観測隊に同行。公立小学校、国立大附属小学校等を経て、現在は松本大学教育学部教授。

(2021年10月24日受付)